たのだ。

もし、ここで白虎隊士達が死ななかったら会津が負けても新しい生活ができたのに……。でも一生懸命に戦って、死を選んだのだから白虎隊士達はこの世にくいは残さなかったのだろう。そして、今その戦争の舞台鶴ヶ城から飯盛山を見てみると、死んでいった白虎隊士達が、いつでも、城を見守っているように思えた。

3年
加瀬　好美

十六歳の命

左手に刀を握り締め、どうどうたる態度でこちらを凝視している少年。私はこの写真の前に立ち止まらずにはいられなかった。

十六歳。私達には身近に感じられる歳である。その十六歳の少年が、会津の誇りを守るために自刃した。それはこの写真の人物、郡長正である。彼は、会津の武士の家に生まれ、会津藩校日新館で学び育った。成績が優秀だったため、他の藩に留学したそうである。

それが悲劇の始まりだった。一人、会津を離れた長正は、その土地の食物がまずいと、母あてに一通の手紙を送った。その手紙のことが、他の生徒達にばれてしまい、批判をかってしまった。それは、確かにその土地の人達にとって侮辱かもしれないが、しかたがなかっただろう。土地になれるということはたいへんだったと思うし、時間がかかることだとも思う。だが、このようなことを察した人はいなかったのだろうか。そう思うと、残念でならなかった。こうして、大勢の前で手紙を読まれ、責められた長正は、会津を愛するがために、自から命を断った。

私達にとって、なんだこんなことでと、安易に考えてしまうことだ。ばからしいと思う人も少なくはないだろう。それに、当時の人達、ましてや武士には当然のことかもしれない。しかし、長正は自分のプライドのためで、自刃したのではないと思う。「ならぬことはならぬ。」という会津武士の心と、会津を汚したくないという気持ちが、彼をこうさせたのだ。

また、彼にとって、会津の誇りを守るということが、命よりも大きな価値があったのかもしれない。

こんなことが、私の脳裏をかけめぐった。

たった十六年の人生、十六歳の命……

左手に刀を握り締め、どうどうたる態度でこちらを凝視している少年。私には、この少年がひとまわりも、ふたまわりも大きく、また、大人に見えた。

シリーズ㊶

我が家の家庭教育

長塚　秋葉百合子

私のおばあちゃんは、「むかし」の人でした。そして、子供の教育には熱心で特に「躾」に関してはシビアな人でした。

私は、嫁いで来てから、いろいろな面で勉強させられました。ですから、長女が生まれた時、私は今まで通り勤めを続け、日中は、おばあちゃんに面倒を見てもらうことにしました。

そこで、これだけは気を付けて教えて行こうと決めた事があります。一つは、あいさつをする事です。まず、家庭の中でのあいさつです。とかく家族の間でのあいさつは省略されがちですが、『親しき仲にも礼儀あり』という様に必要だと思いました。朝の「おはよう」で始まり、寝る時の「おやすみなさい」で、その一日が終わります。そして、対外的には自分から先にはっきりとあいさつをする様に教えました。

二つめは、人を思いやる気持ちをもつという事です。

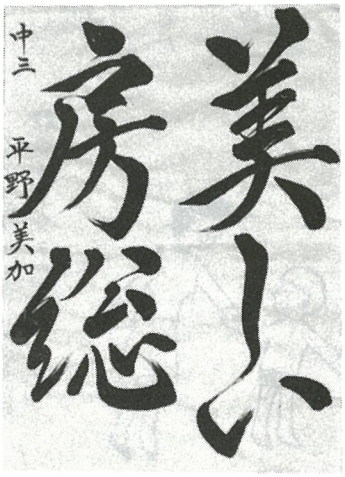
最近、よく「いじめ」の問題が取り上げられますが、これは幼い頃から人を思いやる気持ちを持たないまま成長し、自分をコントロールできなくなってしまうからだと思います。

三つめは、自分の考えをはっきり人に伝えるという事です。そして、それには人の考え（話）を良く聞く耳を持つということです。しかし、親はとかく忙しいからと言って子供の話を上の空で聞いたり、子供が何かしようとする前にそれを中止させたりしがちですが、これは絶対にしてはいけない事でしょう。子供の意志を確実に掴む事が大切な事ですから。

家庭によって育児、躾は千差万別だと思います。だから、「これが正しい家庭教育のあり方」と言えるのは無いと思う。

人それぞれ、個性があるように、家庭教育にも違いがあってもいいと思います。

子供達にとって、家庭はエネルギーの補給基地、砂漠の中のオアシス、そんな思いを託しながら、学校から元気に帰ってくるのを待っている毎日です。



3年
平野　美加